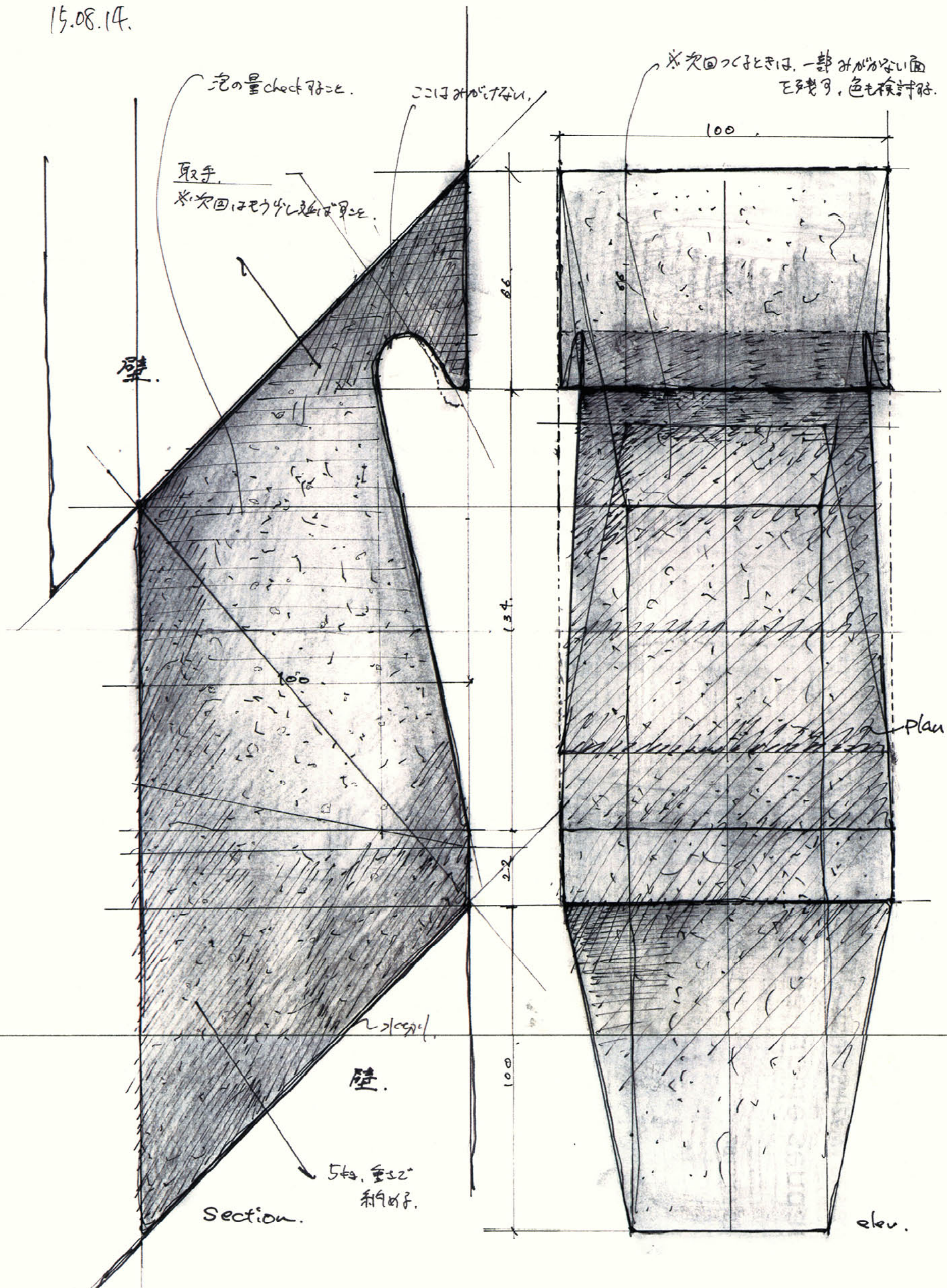
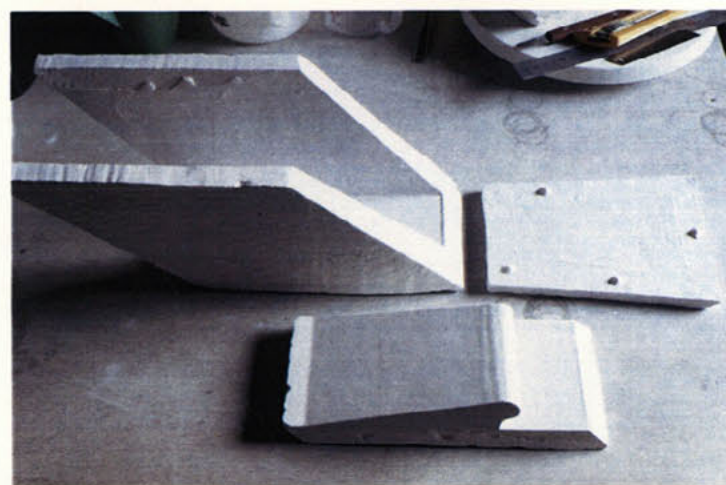
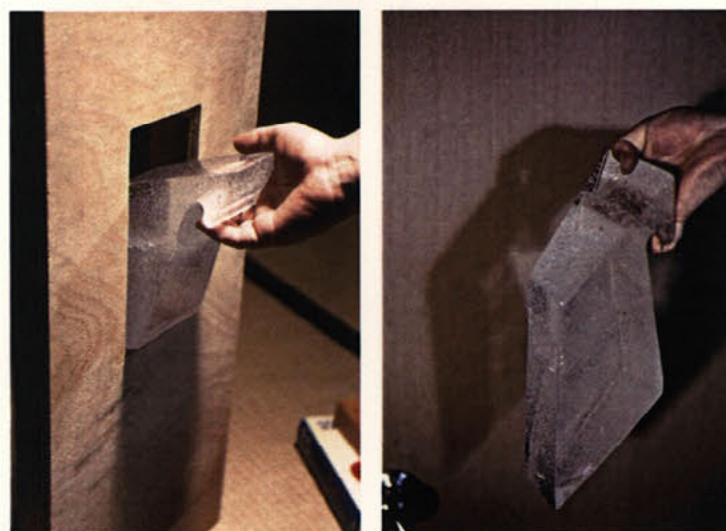


15.08.14.



# キルンキャストによるかたまりのガラス窓

ある路地に建つ町家の壁に、ぼっかりと穴が空いている。

大工「おいおいおいみまちゃん、壁に穴、開いたらろっく大丈夫あり？」  
大工「なんでこんなとこに穴が開くかねえ。」  
トントンカンテン・・・  
大工「これじゃ雨、はいっちまうから、とりあえず雨が入らないように塞いでおいたからよ。」

◆ 近所の若い設計者の部屋  
若者「おい、ちょっとこの図面見てみ、これどうよう取っ手に指いれがぼつと抜けるっていう、がぼつと。」  
若者「いいねえ、ガラスの自重で収まってる感じ、がぼつと抜けたらおもしろいね。」  
若者「上下左右を斜めにカットしておけば、雨仕舞いも大丈夫だろ。」  
若者「知り合いのガラス職人おるけん、その人に作ってもらおうぜ！」  
若者「重さはどうだろ、このガラス重すぎん？」  
若者「計算上は50kg、片手でがぼつとつける、ざりざりの重さ。」

◆ 庭から板で埋まった隣家の穴を眺める老夫婦  
おじいさん「あらあ、穴、板で塞がってるあ。」  
おばあさん「あらあ、穴、板で塞がってるあ。」  
おじいさん「穴からうちの柿の葉、よく見えてたろうになあ。」

◆ 工務ガラス工房にて  
ガラス職人「おっと、また溶けたガラスが漏れてら。」  
ガラス職人「普段やってるものどちいって違うからなあ、柿が斜めになる所は少し工夫しないとすうらだな。」

◆ 路上にて  
ちびっこ「パン屋さんボール取って！」  
パン屋「ばかやろ、おれはみまちゃんにきたんだ。お前と遊んでるひまなんてない。」  
ちびっこ「ぼくだってほんとはおじいさんやなくておねえさんと遊びたいやい。だけど最近おねえさん全然外に出てこないんだもん。」  
パン屋「だからおれがこうやってパンの匂いをださ、あの穴から・・・いつのまにか穴が塞がってるあ。」

ちびっこ「ぼくも穴からボールにお手紙書いて投げ入れようって思ったけど、塞がっちゃった！」

◆ 工務ガラス工房に珍客が：  
板前「おう、お前、なんかへんなガラス作ってるらしいやねえか。」  
ガラス職人「どうした、急に、おれは毎日ガラスつくってメシ食ってんだよ。」  
板前「ガラスでメシねえ、器用なやつもいたもんだ。メシは着で食うもんだろ。」  
ガラス職人「夕々に来たと思つたら、ジヤマシに来たなら帰れ帰れ。」

板前「元寇だ、いや、いつもと違うもの作ってるって噂になってからよ。」  
ガラス職人「ああ、なんだあれのことか。石頭のお前にはわかるか。キルンキャストっていう作り方で、耐火石膏で型つくって、その型にガラスの粒を詰めて、それをこの電気が入って溶かして・・・」  
板前「なんだか茶碗蒸しみたいだな。」  
ガラス職人「やっぱジヤマシにきたんじやねえか！」

◆ 再び、町家では：  
大工「こりゃなかなか難しいぞ。」  
若者「ガラスの方を合わせるのとはなかなかもっと大変なので、やっぱり木枠の方でガラスに合わせて削ってもらいたくて。」  
大工「まあそりゃ、こっちは仕事だわな。しかしこんなに着たい塊みたいな窓も初めてだ。ガラスってこんなふうに見えるもんなんだなあ。」  
若者「ガラスのコップとか作ってる職人さんに頼んだんです。いちばん得意なのはガラスの彫刻みたいだけだ。」  
大工「よし、これでいいだろ、きれいはまったよ。」

◆ 庭から隣家の穴を再び眺める老夫婦  
おじいさん「あらあ、穴、ガラスになってらあ。」  
おばあさん「あらあ、穴、ガラスになってらあ。」  
おじいさん「つぶつぶ泡、たくさんはいると、ばばあ。」  
おじいさん「つぶつぶにうつつ、十の柿が百に見えるかもしれないのう。はたまた、ぼんやりオレンジ色に染じかもしれないのう。」

◆ 数日後、町家にて  
板前「みまちゃん元寇になつたらしいやねえか。」  
パン屋「そりゃみたいたいな、おれのパンの匂いが届いたんだろうよ。」  
ちびっこ「建つよ！ぼくのボールと手紙があの穴に入ったからだよ！」  
おじいさん「ばばあ、やっぱ柿が万に見えたんかのう。」  
おばあさん「おうちをぼんやり、オレンジいろに染めたんかもしれんのう。」

◆ わたしたちは建築業界ではない、外の世界のガラス職人とともに、ひとつの窓をつくりました。  
建築は、ガラスという素材の可能性を広げ、育てて来た分野のひとつであると思いますが、近代建築が確立した透明な・フラットなガラスのイメージから、私たちはなかなか抜け出せていない様に思います。  
おっかなびっくりガラスに触れ、指紋や汚れがつくのが気になる。そういつたガラスとは違う世界観のガラスを、生活の中に取り込めたら、建築の中でガラスという素材の可能性はもっと広がるのではないかと考えています。